

TOPICS 今号のトピックス

- 公開セミナー ラジオを楽しむ！ 名古屋開催
- 公開セミナー 制作者に聞く！ 連続テレビ小説「あまちゃん」
- テレビ放送開始60周年記念 名作上映会「なつかしの番組をもう一度」
- 事業の全国展開スタート
- 平成25年度の保存番組が決定他

■公開セミナー ラジオを楽しむ！ 名古屋開催

10月26日、公開セミナー「ラジオを楽しむ！」の第3回を、今秋、NHK・民放連共同ラジオキャンペーンが行われた名古屋で開催した。取り上げた作品は、今年の放送後、日本民間放送連盟賞ほか各賞を受賞した、CBCラジオと東海ラジオ放送の2番組。番組鑑賞後、制作者から、番組への思い、番組作りの苦労など、ラジオ制作現場の生の声を伺った。会場は、愛知大学名古屋キャンパス。ラジオ好きのリスナーを始め、放送部に所属する高校生、メディア学科の大学生など140名が参加し、制作者の話に熱心に耳を傾けた。

- [登壇者] 菅野光太郎 (CBCラジオ)
秋田 和典 (東海ラジオ放送)
- [司会] 石井 彰 (放送作家)



[鑑賞作品]

- ラジオ特集「隙間 おひとりさまを支える現場から」
(2012.5.20放送／中部日本放送)
- 「よみがえる話芸 節談説教」
(2012.5.27放送／東海ラジオ放送)

『隙間 おひとりさまを支える現場から』は、身寄りのない高齢者をサポートしているNPOの取材を通じて、「おひとりさま」と呼ばれる高齢者を取り巻く現状、認知症の高齢者を支えるために作られた成年後見制度の不備など、行政が見落としている「隙間」を伝えた説得力のある作品。

『よみがえる話芸 節談説教』は、落語や講談など日本の話芸の源流といわれる「節談説教」の魅力をわかりやすく伝え、ラジオの良さを生かした上質な教養・娯楽番組として高い評価を受け、数々の賞を受賞した作品。

番組作りのきっかけを、秋田氏は「三重県津市のご住職が節談説教の活動を始めた」と伺い調べ始めた所、祖父江省念さんという昭和の名人と言われた説教師さんがいた事、そのお孫さんの佳乃さんがその遺志を継いで説教をされているという事を知り、企画を立て始めました。その後、祖父江省念さんが、番組にゲスト出演されたテープが見つかった。本当に偶然だったのですが、それが大きなポイントになりました。」、菅野氏は「NPOの現場に取材に行ったら、銀行のお金を引き出すのにも、病院に入るのにも、老人ホームなどの施設に入るのにも保証人が必要という事を知った。それでは、一人暮らしで市が保護してくれる生活保護以外の方、お金を貯めて何とか暮らしている人達が悲しい思いをするという現実がある。私はまだ43歳ですが、10年後、20年後、これが解決しなかったらどうなるのだろうと思い、取材を始めました。また、実際にこういう事がある事を知って貰いたいと思いました。」と振り返った。



番組を作る上で苦労した点を、秋田氏は「祖父江省念さんの語りをどうやって伝えるか、魅力をどう伝えるかという事、節談説教が日本の話芸の源流であるというこの解説の部分で、どういう風にわかりやすく表現するか。大きな点はその二つでした。そういう部分で、ご健在だった話芸研究家の関山先生に色々アドバイスを頂きました。関山さんがお亡くなりになる前に番組を聴かれ大変喜ばれた。それは嬉しかったですね。」、菅野氏は「私はその場に行ってどういふ音があるかというのを凄く気にします。風の音、部屋の中での料理の音など、ただ音を録るだけだと、その音に聞こえない時もある。たくさん音を録ってきて、どういう風にしたら臨場感のある音になるか、現場にいるように思える音作りが出来るかに、苦勞しました。」と語った。石井氏が「ラジオは音と言葉と音楽だけで伝える。ラジオ制作者の中には映像がない事に負い目を感じている人がいるが、そうではない。今日、皆さんが感じた祖父江省念さん、皆さん



の頭の中でそれぞれ省念さんを思い浮かべている。百人いれば百通りの省念さんがいる。この想像力が実はラジオを楽しむコツでもあるし、楽しさでもあるのです。」と加えた。

今後どんな番組を作りたいか、菅野氏は「地域で頑張っている人達を探し、その人に光を当てるような形で紹介し、そこに人の温もりを感じられる番組を作っていければと考えている」、秋田氏は「地域の人や話題を記録して紹介する事は勿論、この地域は割合古いものが残っていると思うので、伝統芸能に限らず、そういう物にも取り組むチャンスがあればと思う。」と述べた。石井氏は「ラジオは地域のメディア。地域の人々が地域に向かって語りかける事こそ、ラジオが生き残っていく最大のポイントだと思う。ラジオは大きなメディアではなく、中くらいのメディアとして、少数派の味方になる事です。一人暮らしの方、高齢の方、寝たきりの方、外国の方、家で引きこもって社会との接点をなくしている若者、お子さんを育てるためにほとんど家の中にいて孤立感にさいなまれている若いお母さん、

そういう人達に向けて語りかけるメディアであれば、ラジオは多くの人に少しずつ聴いて貰えると思う。」と語った。

会場に参加した高校生から「私は、喋っている人達の気持ちが伝わってくるラジオが大好きです。今日聴いた二つの作品も、伝えたいという気持ちがあるからこういう作品が出来るのだなと思い、放送部でラジオを作る時に何を伝えたいかというのをしっかり皆で考えて作っていきたい。」と感想が述べられた。

最後に、菅野氏は「ラジオの良い所は人の温かみを感じられる所。ネットやメールでも交流は出来るが、その人の本当の雰囲気などは、なかなか伝わらない。少し人恋しいなと思っている人がいたら、ラジオは友達になってくれると思います。実際耳元で喋り手がずっと語りかけてくれているので、そういった意味では人を感じるにはとても良いメディアだと思う」、秋田氏は「とにかくラジオを習慣づけて聴いて頂けば、大変ありがたいです」、石井氏は「一人で暮らしていると不安になる。寂くなる。その時にラジオから流れてくる声がどれほど私達を励ましてくれるか。孤立している人と人を繋ぐメディアとしては、ラジオが最も温かく大事なメディアだと思う。」と締めくくった。

■公開セミナー 制作者に聞く！ 連続テレビ小説「あまちゃん」

11月30日、公開セミナー「制作者に聞く！」を開催。今回は、ストーリーの面白さ、明るさ、テンポの良さで、日本中を朝から元気してくれた、NHKの連続テレビ小説『あまちゃん』（NHK）を取り上げた。子供から大人まで、幅広い層に愛され、社会現象にまでなった『あまちゃん』を生み出したスタッフから、番組にかけた思い、撮影現場のエピソードなど、たっぷり伺った。『あまちゃん』人気を裏付けるように1900名を超える応募があった。

【登壇者】 訓覇 圭 (制作) 井上 剛 (演出)
吉田照幸 (演出) 丸山純也 (美術)

【司会】 木俣 冬 (ライター)

撮影開始は昨年9月。井上氏は「朝ドラは通常11月位から撮影が始まるが、今回は海のシーンを先に撮るために9月から始めた。季節はだんだん寒くなっていくのに海のシーンがいっぱい出てくるという逆境から始まった」、訓覇氏は「東京の作る朝ドラは、秋からクランクインなので、やっちゃいけないネタだと思って相当悩みました。海だけ高知で撮ろうとか。それが、撮影中ずっと夏のような暑さだった。本当に奇跡から始まった。」と振り返った。丸山氏が「美術スタッフに海の中に水槽を組んでくれという無茶な話もありましたね。」と笑いながら加えた。



久慈の町のロケハンの写真を見ながら、数カットしか映らなかったスタッフ通称「丸さんタワー」（写真）や灯台の足元に書かれた「STOP」の文字の話に。どちらも今も町に残っている。井上氏は「台本では『灯台に落書きが書いてある』と書かれていたが、現場で落書きしては駄目と言われ、どこに書こうか必死に考え、足元に「STOP」と大きく書けば良いのではと。お母さんはこの手前で止まったがアキはこれを飛び越えた。アキが飛ぶ時は、擦れて「STEP」に見えるようになっている。」と語った。

『あまちゃん』は5人の演出家が担当。訓覇氏は「宮藤官九郎さんの脚本の面白さをお互いに引き出し合える事が大事と思い、笑いをやってきた吉田さん等にも関わって貰った。」という。『サラリーマンNEO』の演出をずっと担当してきた吉田氏は「普通、最後はきっちり終わりたいのに、その前に音楽を終わらせて、何かぬるっとして終わるのがコトの出身だねと言われた事を覚えている。宮藤さんの脚本の気取りが無い所を表したかった。」という。また「宮藤さんの台本はセリフの応酬が多いので、カメラのほうを追いつかない。」と撮影苦労話を明かした。

能年玲奈さんについて、井上氏は「水中ロケの時、まだセリフもないのに毎日生き生きした顔をしている。その時に普通の子ではないなと思った。また、台本で難しい書かれ方をされていても、その場の空気を大事にしていた。共演者の小泉今日子さんや宮本信子さんから学んでいるのではと思った。」、吉田氏は「『白目を練習してきました』とか、ギャグに関しても努力してきた。話しかけて反応がなくても、実際演じると理解していて、頭が良い子だなと思った。」と語った。



丸山 純也

東京に着いたアキに水口がEDOシアターを案内するシーン。セットとロケが絶妙に繋がっている。丸山氏は「壁の質感や雰囲気を繋げて自然に流れるようにした。」と語る。また、美術資料を見ながら、ロケ地・人物・衣装・番組ロゴのデザイン、映像合成等を説明。

EDOシアターの裏の風呂屋は天野家の正面玄関のセットを使い回しているという裏話も披露した。

東京で鈴鹿と春子が初めて会う無頼鮪（18週・井上演出）と鈴鹿が春子が自分の影武者だったと知るスタジオ（22週・吉田演出）のシーン。井上氏は「影武者は、第4週からの伏線。安部ちゃんがアキの代わりにウニを獲得するシーンで、影武者という言葉が初めて出る。それを定着させるために宮藤さんは落武者と言わせている。その帰着点が22週。18週はその影武者と本物が初めて相まみえる。」、吉田氏は「鈴鹿が影武者の事を知っていたかは最後までグレー。わかりやすいドラマなら、どちらかと描く所を、グレーで描くという事は、現場や役者さんにとって、どう動いて良いか難しい。これを撮



吉田 照幸

る時も現場で生まれる感情を大事に撮ったが、異様な緊迫感がありました。笑いからこういう緊張感まで密度の濃い物が自然に描ける宮藤さんの本は凄いいし、役者にもスタッフにも演出家にも求めるものが大きいと感じた。」と語った。

震災のシーン。トンネルから出てきて「もう遅い」と言うユイの表情が印象的。訓覇氏は「宮藤さんとの打合せで、震災に関して、なるべく直接的な表現は避けようとしていた。」という。台本では、トンネルの外は、ユイの顔で終わっている。どこまで外を見せるかは監督に任されていた。井上氏は「切れた線路越しに立っているユイと大吉を撮る事も考えられるが、ここではそれを撮っていない。そっちにはカメラは入らないと決めた。但し、美術部にはユイの見た目方向に震災の爪痕をリアルに表現するように要求した。それらは一切映像には映っていないが、そういう事で彼女の表情が生まれていったと思う。震災のシーンは作り物とはいえその場を借りて再現しなければならない美術部が辛かったと思う。」と述べた。吉田氏が「僕らは物語の中に入っていて、登場人物が見た主観を大事に表現した。僕は震災のシーンには関わっていないが、視聴者として見ていて、凄く自然に見られた。このシーンはちょっとドキッとした。このドラマは、最後の方は自分達がやっているというよりも何かが僕達を動かしているような感じがした。」と加えた。



井上 剛

タイトルバックと重なるラストシーン。井上氏は「時計を逆回転したかった訳ではなく、今度はユイもいて未来に向かっていっていると、お馴染みの映像を使って見て頂きたかった。」と語った。最後に、井上氏は「視聴者の皆さんが、ツイッターなど色々な形で取り上げてくれた。番組の半分位は皆さんが作ったのではと思う。」と締めくくった。

■テレビ放送開始60周年記念 名作上映会「なつかしの番組をもう一度」

テレビ放送開始60年を記念して、10月10日から11月24日までの40日間、情報サロンで番組上映会を行った。放送ライブラリーが公開している1万5千本ものテレビ番組の中から、放送開始から30年間に放送されたドラマ、ドキュメンタリー、クイズ、音楽、コメディなど、選りすぐりの名作20番組を上映した。

会場には、開局を知らせるポスターや新聞記事、上映番組の放送台本、テレビ受像機の広告など、貴重な資料を展示し、当時の雰囲気を伝えた。期間中、のべ668人の入場者があった。上映した主な番組は次の通り。「NHK東京テレビジョン開局記念行事の記録」（1953 NHK）、「事件記者」（1958 NHK）、「私は貝になりたい」（1958 TBS）、「光子の窓」（1960 日本テレビ）、

「夢であいましょう」（1962 NHK）、「魔法のじゅうたん」（1963 NHK）、「おはなはん」（1966 NHK）、「三匹の侍」（1966 フジテレビ）、「若者たち」（1966 フジテレビ）、「てなもんや三度笠」（1966 朝日放送）、「ハノイ 田英夫の証言」（1967 TBS）、「巨泉前武ゲバゲバ60分!」（1971 日本テレビ）、「11PM」（1973 日本テレビ）、「岸辺のアルバム」（1977 TBS）。

後半30年間の番組上映会を2月中旬から開催する予定。



■事業の全国展開スタート

放送番組センターでは「事業の全国展開」「公開番組の利活用の推進」を今年度の事業計画の重点テーマとし、放送ライブラリーで公開している番組を全国各所で活用していくことを目標に掲げ、サテライトライブラリーを設置し各地の図書館や公共施設などで公開していくこと、及び、大学の講義の中で番組を活用していくことを実現するため、検討を重ね、準備を進めてきた。

昨年11月、公共施設や大学で放送ライブラリーの公開番組を視聴し活用する試験運用をスタートさせた。これらの番組公開方法は、運用中のBL・クリエイター支援サービスのIP伝送システムを活用している。

■市川市にサテライトライブラリーを設置

公共施設での活用は、千葉県市川市から市川市文学ミュージアムで放送ライブラリーの公開番組を活用したいとの要望があり、11月9日から同ミュージアムのベルホール（46人収容）で「水木洋子テレビドラマ上映会」を開催している。市川市にゆかりのある脚本家・水木洋子さんのテレビドラマ作品を放送ライブラリーで



7番組一般公開しており、それらの番組を今回、サテライトライブラリー第一号として設置し、IP伝送システムを活用しての番組上映会開催が実現した。

同ミュージアムでは、「水木洋子展」を開催中で、上映会は展示会開催期間中に15日間限定で開催する（2月の上映日は1日、4日、15日、16日の4日間）。12月までの7日間の上映会では、186人の参加者を数えている。

■長崎県立大学での公開番組の活用

大学での教育利用については、長崎県立大学の国際情報学部情報メディア学科から公開番組を授業で活用したいと希望があり、25年度後期の「映像研究」の講義（受講生80人）で、11月26日から放送ライブラリーで公開しているドキュメンタリーやドラマなど4番組を使って授業で上映を行っている。また、受講生には講義の前後に番組視聴させることができるようにしたいとの要望があり、校内LL教室で限定した10台のパソコンからのみ、番組が視聴できるようにした。

講義での上映や事前視聴にあたっては、BL・クリエイター支援サービスと同様、教授と受講生にID・パスワードを与え、ログインして利用する仕組みとなっている。利用実績のすべてのログを保存しており、適切に視聴・上映されているか、センター側で随時確認できるようにしてあり、講義前後の受講生の視聴回数も把握できる。これまでに多くの学生の視聴があった。

■平成25年度の保存番組が決定他

■「2013 秋の人気番組展」

10/18～11/24、NHK、東京キー局、TOKYO MX、tvkの協力を得て、恒例の「秋の人気番組展」を開催。今回は、新たにBS7社（BS日テレ、BS朝日、BS-TBS、BSジャパン、BSフジ、BS11、WOWOW）の協力も得て、番組ポスターの展示やタイムテーブルを配付した。来場者から「今回はBSの情報がたくさんあり面白かった。今後も色々なチャンネルの情報を楽しみにしている。」という感想が寄せられた。



■企画展「ウルトラヒーローと特撮番組の50年」

12/12より企画展「ウルトラヒーローと特撮番組の50年」を開催。テレビの歴史と共にお茶の間で愛されてきた、円谷特撮テレビ番組の歴史を振り返るもの。人気のウルトラマンシリーズの展示目当ての親子連れなど、多くの来場者で賑わっている。（2/16迄）



■番組保存委員会で25年度の保存番組が決定

平成25年11月に開催された第2回番組保存委員会で、平成25年度の保存対象番組を決定した。今年度のテレビ保存対象番組は、平成23年度に放送された番組で、各社が提供可否調査中の番組を合わせ、1,075本を選定した。

ラジオ保存対象番組は、平成24、25年度放送の受賞番組や各賞参加番組を中心に選定しており、既にリストアップ済みの番組と合わせると350本程度になる見込みである。

また、平成8、9年度に収集・保存を進め、保存のみに留まっていた阪神・淡路大震災関連番組を、震災体験を風化させず、今後の防災に役立てる目的で、上映会で公開していく計画を報告し了承された。上映会は、平成26年1月16日と17日に放送ライブラリーで開催した。

■BL・クリエイター支援サービス利用状況

本格運用開始から12月末までの利用状況。

◇配信番組数：テレビ番組2,746本、ラジオ番組744本

◇利用登録者数 450人（91社）、IPアドレス登録130社

◇視聴実績 テレビ番組 683回、ラジオ番組 87回

今後も本サービスの充実を図り、放送局員への利用を促進していく。利用方法など本サービスについてのお問い合わせは、当センター業務課まで（TEL：045-222-2881）。